『比較民俗研究』22. 2008／3

大森貝塚のサル
－狒狒とヒヒ－

吉岡郁夫※

いとぐち

明治10年（1877）、アメリカの動物学者モース Edward Sylvester Morse は横浜から東京（新橋）へ向かう汽車の窓から、大森貝塚（東京都大田区・品川区）を発見したことはよく知られている。その３ヵ月後、９月16日に初めてこの貝塚の予備調査を行い、10月９日から約１ヵ月でこの発掘調査を完了した（磯野 1987, p.115）。

大森貝塚の報告書は東京大学の欧文紀要第１号として発行され、次いで矢田部良吉の和訳で『大森介墟古物編』（注１）が刊行されている。この報告書のなかで、モースはサルの下顎骨が出土していることを記し、これをバブーン（ヒヒ類）ではないかといっている（Morse 1877, p.16）。

大森貝塚のサルのことは長い間忘れていたが、私は中学生のとき、古生物学者の直良（1946, p.164）の著書を読んでこのサルのことを知った。最近改めてモースの原著やその訳本を読んで、これらのなかには若干の誤りがあり、モースがなぜこのサルをバブーンと間違えたかという疑問が浮かんできた。

1　報告書の記載

モースはこのサルの骨について、どのように記載し考察したか。英文の方は原著を見ていただくことにして、まず矢田部の訳文から見ることにしよう。矢田部は当時発足して間もない生物学科の植物学担当の教授である。『大森介墟古物編』は矢田部が口訳し、それを寺内章明が筆記したものである。

次の文中、〔〕は訳者の割注で、英文にはない。また、訳文には句読点はないが、読みやすくするため引用者が付けた。

> 猿骨ハ日本現今ノ猿（マカコス）（注２）ニ属スル者モ得タレドモ、亦其出セル大猴（バブーン類カ）ノ右下顎骨ニ至テハ寧ロ呂栄（注３）・セレビース（注４）諸島ニ産スルシノピシコス〔猿属ノ名〕ニ似タリトセンカ、但上時ニ在テハ此物敢テ日本ニナシトモ定メ難シ。其ハ方今日本ノ有識者コソ妄誕トシテ取ラザレ、其人民ハ通シテ上古ニ偉大ノ猿アリシ事ヲ伝フレバナリ。且ツ有名ノ古物家蜷川氏ニ聞ク所ニ拠レバ、七百年前京師（注５）ニ妖怪アリ。其形猿ノ如ク屢々皇居ヲ侵スト云ヒ〔訳者曰、是レ俚談鵺ノ説ヲ実事ト誤リ聞キシモノナラン〕、東京大学生徒藤谷氏ノ此等ニ関スル日本古記ヲ集メテ余ニ寄セタルモ

※日本民俗学会会員

ノノ中ニモ、理外ノ談ハ姑ク措キ、其一二ノ図説ニ於テハ形質ノ全クシノピシコスニ合セル形ヲ大ニ口吻長ク唇反セル猿属ヲ示セリ。然リト雖モ、大森一片ノ古骨ノミニテハ未ダ果シテ此動物ノ形質如何ヲ明言スル能ハズ。(モース 1879, 復刻p. 113,アンダーラインは原訳文)

昭和初期ごろまでの学術論文には、このように片仮名混りの文語体で書かれたものが少なくない。

これよりずっと後の昭和58年（1983）に、口語訳が出ているので、次にそれを引用する。

ニホンザル、すなわちマカク属のサルのほか、ヒヒのような大猿かもしれない動物の右下顎骨をみいだした。これは、現在、日本でみいだされるいかなるサルにも似ていないことは確かである。おそらくは、フィリピンやセレベスでみいだされるイヌザルだろう。

この種が、歴史時代に日本に生存していたことは、ことによるとありうるかもしれない。というのは、日本人は、巨大なサルにかんする話を昔からよく知っているからである。知識人たちは、これらの話を、架空のものとみなしてはいるけれども。

すぐれた好古家蜷川（式胤（のりたね））氏の教示によると、大猿と想像される巨大な代物（しろもの）が、七〇〇年前に京都御所の近くで目撃されたとの報告があるという。帝国大学学生藤谷（孝雄）君は、サルについての多くの資料をあつめてくださった。ありえないことが数多く語られてはいるけれども、一部の絵や記述は、鼻口長く唇が突出した大猿を想起させる。これはイヌザルによく一致する特徴である。

比較すべき現生種の標本がないのだから、大森発見の唯一の骨片から、この動物の性格を確言できないことはもちろんである。(近藤・佐原訳 p.48、ルビは訳者ら)

最近は文語体の論文より、英文の方がわかりやすいという研究者が増えている。しかし、大森のサルの記載は現代語訳も含めて、少し説明と訂正を加える必要がある。

2　学名・和名の混乱

少し回り道になるが、まずは学名の訂正から始めよう。矢田部訳のシノピシコスを原著の英文に当ってみると、Cynopithicusとなっている。これはCynopithecusの誤植である。植物学者の矢田部はこれをそのまま片仮名で表記した。近藤と佐原（1983, p.48）はその誤植に気付いていただろうが、わざわざ「イヌザル」と訳してしまった。荒俣（1988, p.79）もイヌザルの名を使っているが、参考文献に近藤らの訳書があるので、それからの引用とわかる。

霊長類関係の本を見ても「イヌザル」という和名は見当たらないので、この名を調べるのに多くの時間を費すことになった。最後に『科学用語語源辞典』で、Cyna、Cynoがイヌを意味することがわかり、ようやく「イヌザル」はシノピテクスの直訳とわかった。

この属名は新しい本には出ていないので、古い本を探してみると、シノピテクス属は1属1種とあり、その1種がクロザルC.nigraである（黒田 1937, p.243)。それなら、この属名は「クロザル属」になるはずだと考え、「クロザル属」（小寺 1987, p61）という名前に出会うことがで

きた。

次に、動物学上のヒヒ類（バブーン）は、日本はいうまでもなく、アジアの大部分（アラビア半島南西部を除く）には棲息していないことをあげておかなければならない。では、モースはなぜ大森のサルがヒヒである可能性を残し、ヒヒの例としてクロザルを引き合いに出したのだろうか。黒田（1963, p.150）は、ヒヒ類には「4属9種あり、クロザルCynopithecus（セレベス）の外〔3属8種は〕アフリカ産」ですべて地上性（クロザルは樹上性）と記している。ここでは、まだクロザルをヒヒ類に加えていることに注意したい。

同じ本の中で、Remane（1963, p.263）もまだCynopithecusの属名を使っているが、「この種（クロザル）がヒヒ類やニホンザル類に近縁であるかどうか疑問である」と疑っている。

さらにもう少し遡ってみると、徳田（1944, p.171）は、ヒヒもクロザルも吻が著しく突出しているが、ヒヒでは鼻口がその先端で前方に向かって開いているのに対して、クロザルでは側方に向かって開いている。この鼻口の特徴は日本のサルなどと同じで、それ故にヒヒ群と異るものとして分類されている。また習性も、ヒヒは地上で活動するが、クロザルは樹上に棲む。「要するにクロザルはヒヒと普通のマカックザルとの中間型を示すと見るべき」だろうと述べている。

クロザルをヒヒ類とマカク属との中間型というのは、戦前の研究者の一般的な見方であったが、1969年、フーデンJ.Foodenはクロザルをマカク属に分類し、その学名をMacaca nigraとした（小寺 1987, p.61より引用）。それ以来、この説を採る研究者が多くなり、最近の霊長類学の本にはクロザル属Cynopithecusの名は見られない。

クロザルの頭胴長は雄で55cmぐらい。全身は黒く、頭頂部の毛が長く突立っているので、和名にはカンムリクロザルという異名がある。オナガザル科に属するが、尾は非常に短い（約2－2.5cm）ので、近年まで類人猿的と考えられ、black apeの英名で呼ばれてきた（注6）。現在はSulawesi（Celebes）crested macaqueと呼ばれている。

3　狒狒とは何か

中国では、古くから深山には多くの正体不明の動物が棲むと信じられていた。中国の本草学関連書にはこれらの怪物が描かれ、奈良時代までに、『爾雅』『山海経』『抱朴子内編』などが伝来している（磯野 2002, p.38）。それよりもずっと後になるが、日本の本草学者に最も大きな影響を与えたのは、『本草綱目』（以下『綱目』）である。

『綱目』は明の万歴20年（1592）ごろ成稿したと推定されている。刊行より11年後、林道春が徳川家康の命を受けて、新渡来の書籍を集めるために長崎に赴き、ちょうど舶来していた『綱目』を購入し、駿府（静岡）に帰って家康に差し出した（上野 1987, p.110）。

『綱目』の著者、李時珍は古来の多くの怪物名をまとめて、猩猩（しょうじょう）と狒狒の二つに分けている。そして狒狒の異名として、

梟羊（きょうよう）（梟陽）（『山海経』）

野人（『方輿志』）
人熊（『爾雅』）

をあげ、さらに山都、山獾、木客、山燥、山鬼、山精、旱魃なども少しずつ差異があるが、同類の怪物としている。

この本は幕末まで日本の本草学者に重用されてきた。正徳２年（1712）に寺島良安の編集した『和漢三才図会』でも、「狒狒」の項は『綱目』からの引用に終始しているので、次にその全文を読み下し文にして記す（注７）

本綱（本草綱目）ニイウ。狒狒ハ西南夷ニ出ヅ。状人ノ如ク、髪ヲ被リ、迅ク走リ、人ヲ食フ。身黒ク毛有リ。人面ニテ唇長ク、踵ヲ反シ、人ヲ見レバ笑フ。其笑ハ上唇目ヲ掩ヒ、其大ナル者ハ長サ丈余ナリ。宋ノ建武年中（494－497）僚人（注８）（狒狒ノ）雌雄ニ頭ヲ（帝ニ）進ズ。其面人ニ似タリ。紅赤色ノ毛ハ獼猴（さる）ニ似テ尾有リ。人言ヲ能クシ、鳥声ノ如ク、善ク生死ヲ知リ、力ハ千鈞（注９）ヲ負ウ。踵デ反ッテ膝無ク、睡ルトキハ物ニ倚リカカル。人ヲ獲レバ先ヅ笑テ後ニ之ヲ食フ。猟人ハ因テ竹筒ヲ以テ臂ヲ貫キ、之ヲ誘イ、其笑フ時ヲ候チテ手ヲ抽キ、錐ヲ以テ其唇ヲ額ニ釘シテ額ニ着ケ、死ヲ候チテ之ヲ取ル。髪極テ長ク頭髪ニ為ル可シ。血ハ靴及ビ緋ヲ染ルニ堪タリ。之ヲ飲メバ人ニ鬼ヲ見セ使メル也。帝乃チ（画）工ニ命ジ之ヲ図シム。

以上の記述をみただけで、狒狒は実在の動物ではなく、架空のものであり、狒狒＝ヒヒ（バブーン）ではないことは明白である。

4　狒狒の記録

モースは日本語の読み書きができなかったが、蜷川や藤谷らの協力で「大猿」（狒狒）についての伝承や記録のあることを知っていた。私が参照することのできた資料はまだ少ないが、次にあげてみよう。

研究者の間でよく知られているのは、小野蘭山の『重訂本草綱目啓蒙』（弘化四年 1847）である。それには、「深山中ニ棲。木曾（長野県）及豊前（福岡・大分県）、薩州（鹿児島県）、飛州（岐阜県）、能州（石川県）ニアリト聞リ」とあり、『綱目』とやや異なるのは「毛ハ皆刺ノ如クシテ色赤シ。死スレバ脱落スト云。ソノ口至テ大ナリ」（東洋文庫）という他は同じである。

田野（2007, p. 89）によると、『啓蒙』とほぼ同じころの『岩見英雄伝』（弘化元年1844）には、岩見重太郎の狒狒退治の話があり、この話は明治末期の『立川文庫』から大正末期の歴史小説を経て、昭和初期の『講談全集』などによって流布されてきたと述べている。

柳田（1999, p. 350）は『啓蒙』をはじめ江戸時代の文献を引いて、「疑いを容れざる一事実は、近世各地で遭遇し乃至は捕殺した猴（さる）に似てこれよりも遥かに大なる一種の動物を、人がヒヒと呼んで居たといふことだけである」といい、次のような文献を引用している。

『和訓栞』（享和２年1802）には、安政（1772～）以後のある年に伊賀（三重県）と紀州（和歌山県）に狒狒が現れ、さらに天和３年（1683）に越後（新潟県）桑取山で、正徳４年（1714）

には伊豆（静岡県）豊出村で捕まったという。内閣文庫にある『雑事録』には会津（福島県）磐梯山麓の塔沢で撃ったというものがあるが、これは狒狒かどうか怪しいものらしい。『有斐斎劄記』にも宝暦（1751-1764）年中、越後の山中で撃ち取った狒狒を実見した人の談話があり、「獼猴（びこう）とは類せず別種のものならん」とあるという。

このように狒狒かどうか怪しいものも少なくないようだが、柳田（1994, p. 351）はそれに続いて、記録の収集よりも「急務は静岡の新聞などに冬になると殆ど毎年一つ位づつは現れる狒狒捕殺の事件を精査」することだと強調している。だが、その後狒狒の調査が行われたということは聞いていないし、現在では狒狒についての伝承も知らない人が多くなっている。もはや日本には、正体不明の動物が棲めるような環境はほとんど失われているのではないだろうか。

5　狒狒とヒヒ

日本の狒狒は中国から伝わったことは疑う余地がないが、ヒヒ類（バブーン）に「狒狒」の名が与えられた経緯については、今のところ手がかりがない。

日本では、明治初期の訳本を見ると、すでに「狒狒」はバブーンの和名として定着しているようにみえる。例えば、明治７年（1874）刊行の田中芳男編訳『動物学』哺乳類（博物館発行）には、ヒヒ類を「狒狒属 Cynocephalus」とし、９種ありと説明している。しかし、江戸時代にはどのような名を与えられていたかは未調査なので、「狒狒」が和名に用いられた事情はわからない。ヒヒ類の外形が狒狒に似ているという程度の理由かも知れないし、中国でジラフが「麒麟」とされていたように、ヒヒと狒狒が結びついた状態で日本に伝えられたようでもある。

なお田中（1874）の訳書には、ヒヒの代表としてマンドリルが図示されているが（上野1982, p. 319）、髙島（1980, p.625）によると、マンドリルが日本に渡来したのは、「昭和９年（1934）６月雌雄が熊本動物園に入ったのが恐らく最初」とされている。

ヒヒ説に対して南方（1911）は、はじめはそれを至当と考えていたが、在欧中諸処の動物園で生きた諸獣を見てから、狒狒はバブーンではなく熊の類と思いついたという（1972a, p. 292）。

南方が公式に狒狒をナマケグマ Melursus ursinus (Shaw)（異名ミツグマ［密熊］、英名 Sloth Bear、Honey Bear）と発表したのは大正４年（1915）である（南方 1972a, p.293）。この中で「予種々攷究して東南アジア産のメルルス・スリビウス（長唇熊また懶熊）（注10）が、産地も毛色も、「長き唇にて人を見ればすなわち上唇目を掩う」も、「反踵して行（あゝ）く」も全く狒狒に当たるを知り、柳田君に報じ置いた」といってる（南方1972a, p.293）。柳田宛の書簡（明治44年［1911］５月18日記）は幸いにも全集（1972b, p.20）に収録されている。

私には、ヒヒ説と南方のナマケグマ説のどちらが正しいかを決めることはできないが、どちらかといえば南方説を採りたい。なぜならば、現在インドや中国にヒヒが棲息しないことが確認されているからである。

まとめ

1　狒狒の記録と伝承

バブーンに「狒狒」という和名が付いたのは、明治7年（1874）刊行の田中訳編『動物学』が最初かどうかまだ確認していないが、遅くともモースが来日した明治10年（1877）以前であることは確かである。モースはその年大森貝塚を調査し、明治12年（1879）に報告書を出し、ニホンザルの骨格の他に、"large baboon-like ape" の右下顎骨を発見したと記載しているところをみると、彼はバブーンが狒狒と呼ばれていることを日本人研究者などから聞いて知っていたと推察される。そこで、バブーン＝狒狒という前提の下に、蜷川式胤や藤谷孝雄に狒狒に関する記録や伝承の収集を依頼したのではないだろうか。その結果は恐らくモースの予想通り、かなり多かったと想像する。

2　東アジアのヒヒ類？

狒狒の資料収集と並行して、モースはヒヒ類の分布についての文献調査を行ったと考えられる。現在の霊長類学では、クロザルはマカク属に落ち着いているが、当時はシノピテクス属というバブーンとマカク属の中間的存在と考えられていた。軟体動物の研究の目的で来日したモースが、狒狒説を受け容れたのは止むを得なかったとみなければならない（注11）。

しかし、モースがなぜフィリピンにもバブーン（クロザル）が分布すると考えたのか、その根拠はよくわからない。フィリピンの現棲の霊長類は、原猿類のフィリピンメガネザルとスローロリス、それにマカク属のカニクイザルの３種である（河合ら1968, p.57, 66, 137、Napier 1987, p. 145, 151, 198、小寺1987, p. 20,25.58、杉山1996, p. 42,52, 132）。この誤報の出所はわからないが、「狒狒」が中国、フィリピン、スラウェシに分布していたとすれば、日本にもかつては棲息していた可能性も否定できない、というモースの結論は一応筋が通っていたというべきであろう。

注

1　矢田部訳の扉には『大森介墟編』とあり、この名もよく使われる。

2　ニホンザル Macaca fuscata。属名はマカク属と表記されることが多い。

3　ルソン。英文ではフィリピンとなっている。

4　スラウェシの旧名（インドネシア）。

5　京都御所。次に訳者矢田部の割注があるが単なる伝承として記したかも知れない。

6　Morse（1879, p.16）も“large baboon-like ape”と記している。

7　原文は漢文。片仮名は主に原著者、一部は引用者改変あるいは付加。平仮名ルビは引用者。()は引用者の補遺。

8　荊州西南部の種族。荒俣1988, p.79による。

9　重さの単位。１鈞＝三十斤＝7680g

10　M.スリビウス、M. Lybius（書簡の図）の種小名は現在使われていない。なお南方（1972a, p.293、1972b, p.24）はアスウェール Aswail（インド土名）、樹懶熊、唇熊、薮熊、長懶熊の異名

をあげている。

11　大森貝塚の発掘よりずっと後のことになるが、日本にはニホンザルが第四紀以前に棲息した形跡はない（直良1944, p.144、鹿間1975, p.365）。

参考文献

荒俣　宏　1988　『世界大博物図鑑』5 哺乳類　78-79頁　平凡社

磯野　直秀　1987　『モースその日その日　ある御雇教師と近代日本』115-120頁　有隣堂

（編）2002　『日本博物誌年表』14-38頁　平凡社

川口　幸男　1991　「クマ科の分類」『世界の動物／分類と飼育』2 食肉目　70-76頁　東京動物園協会

河合　雅雄・岩本 光雄・吉場 健二　1979　『世界のサル』173-187頁　毎日新聞社

小寺　重孝　1987　「オナガザル科の分類」『世界の動物／分類と飼育』1 霊長目　54-85頁　東京動物園協会

黒田 長礼　1937　『脊椎動物大系　哺乳類』245, 243頁　三省堂　1963「哺乳類」『動物系統分類学』10（下）脊椎動物IV　哺乳類　1-229頁　中山書店

南方 熊楠　1972a　「蜂という獣の話」『南方熊楠全集』5 巻　287-296頁　平凡社（『日本及日本人』669号　1915）

1972b　「柳田国男宛書簡 5」『南方熊楠全集』8 巻　20-37頁　平凡社

Morse, E.S. 1879 "Shell Mounds of Omori", Memoirs of Sci. Dep., Univ. of Tokio Japan, Vol. 1 Pt. 1, pp. 1-36

（復刻　東京都大森貝塚保存会　1967 15-56項）

（矢田部良吉訳）「大森介墟古物編」『理科会枠』（頁なし）東京大学

（復刻　東京都大森貝塚保存会　1967 58-126頁）

（近藤義郎・佐原真訳編）　1983『大森貝塚』（岩波文庫）15-121頁　岩波書店

直良　信夫　1946『古代日本の漁猟生活』164-166頁　葦牙書房

（初版『古代の漁猟』葦牙書房1941）

1944『日本哺乳動物史』255-256頁　奈良　養徳社

Napier, J.R. & P.H.（伊沢紘生訳）　1987『世界の霊長類』どうぶつ社

Remane, A.（内田亨訳）1963「霊長類」『動物系統分類学』10（下）脊椎動物IV　哺乳類　230-269頁　中山書店

鹿間　時夫　1975「霊長目」『新版古生物学』III　361-376頁　朝倉書店

杉山　幸丸 編　1996『サルの百科』（動物百科）　146-147頁　データハウス

髙島　春雄　1980「日本に於ける動物の変遷」『明治前日本生物学史』1 巻　新訂版　584-630頁　野間科学医学研究資料館

田野　登　2007「都心周辺部にみえる岩見重太郎伝説　野里住吉神社一夜宮女祭に関する言説の変容」『日本民俗学』249号　78-110頁

徳田　御稔　1944『大東亜の動物』哺乳類　南方篇　170-171、236-237頁　大阪　精華房
東京都大森貝塚保存会 編　1967　『大森貝塚』　1-126頁　中央公論美術出版
上野　益三（解説）　1982『斯魯斯動物学・田中芳男動物学』（江戸科学古典叢書34）恒和出版
1987『日本動物学史』106-116頁　八坂書房
柳田　国男　1999『柳田国男全集』20巻　350-352頁筑摩書房（初出『郷土研究』4巻12号　1917）

新刊紹介

野村伸一　編著
『東アジアの祭祀伝承と女性救済―目連救母と芸能の諸相―』

中国の民衆に広く知られている地獄巡りの話といえば『目連救母』の話であろう。盂蘭盆の施餓鬼の由来談でもある、目連が地獄に落ちて与えられる食べ物が焔に化してしまい飢餓に苦しむ母を救済する話だが、この時母を捜して地獄巡りをし、その様子が種々な芸能形態をとって伝承されている。本著はこの目連を題材とする祭祀芸能について、中国、韓国、日本の事例を取り上げ、東アジアの精神史、文化史上に提示することを課題として調査研究を進め、その成果をまとめた大作である。

本書の構成は、野村伸一が目連救母の祭祀と芸能を概説し、具体的な調査事例を付す第一部と、田仲一成「演劇史における目連戯」、馬建華『女性の救済―莆仙目連戯と『血盆経』―」、李京燁「韓国の目連伝承と盂蘭盆斎」、川島秀一「巫女が伝える目連救母伝説―陸前北部の「口寄せ」縁起―」、鈴木正崇「神楽の中の目連とその比較」の論考をおさめた第二部からなる。

目連救母を題材とする祭祀芸能を東アジアという視点から取り上げる取り組みに掛けた膨大な労力に対して敬服するとともに比較研究の新展開に賛辞を送りたい。

目連戯は仏教的な背景を抜きにしては考えられない。韓国の論考が盂蘭盆会に終始していることからも明かである。日本の場合は仏教との関わり合いよりも民俗信仰との関わり合いが深い事例が挙げられるのみで、盂蘭盆の施餓鬼供養と結びついた芸能の虫生の“鬼来迎“まで取り上げられていない。中国の場合も超度儀礼については事例が述べられているものの目連戯と仏教との関係については言及されていない。

また説話の要素として、地獄巡りの要素の重要性を見過ごしに出来ない。田仲の論考の中で関連する地獄巡り伝承について触れられているもののその意義についてふれられてはいない。死者を救うための地獄巡りは、宝巻の流れをくむ説唱芸能を始めとして様々な伝承に取り入れられている。何故地獄巡りが好まれるのかが目連戯の意義を探る鍵となるといえるのではないか。明・清時代は女性が主役となる血の池地獄が盛んに説かれた時代であるが、これは女性の穢れが強調されなければならないほど、女性が自己主張をし始め、抑え込まれなければならないような空気のある時代だったのかもしれない。更なる論考が待たれる。

（廣田律子）

風響社　2007年8月　7200円（税別）